

女性政治家は「エンパシー」に優れている？

眞鍋由比

『女たちのポリティクス』 ブレイディみかこ著 幻冬舎新書 2021

世界各国の女性政治家の分析。

フランスの極右マリーヌ・ルペンが女性擁護のふりをしてフェミニズムをイスラム排除の政策へ支持をひろげようとしている。フェミニズムをナショナリズムに利用することを「フェモナショナリズム」というのだと初めて知った。

存在感の或る賢明な女性としてドイツのメルケル首相を尊敬していた。映画「帰ってきたヒトラー」でも「迫力あるおばさん」とヒトラーをビビらせていたしね。しかし彼女のしたたかさ。娘のように可愛がってもらったコール首相のピンチに手のひらを返して踏み台にしたりする。助けを求めてきたメイ首相に対する厳しさ。他人にも自分にも厳しい、一筋縄ではいかない人。移民政策で失敗し、支持率が落ちていたけれどコロナ対策で爆上がり。

ニュージーランドのアーダーンには驚いた。「育休ってとれるものなの？ 首相なのに」などと最初斜めに見ていた私は銃乱射事件の犯人の名前を口にしないときっぱり宣言し、コロナ対策の決断の早さ的確さにはすっかりファンになってしまった。あれほど若い首相が至上最高の支持率をたたき出しているのは当然で、あの国がうらやましくすらある。

アメリカのオカシオ・コルテスの見事なパフォーマンスもなんでもSNSでながれてきて知っていた。フォトジェニックというよりもインスタ映えする女性政治家たちが活躍しているのは素直にうれしい。（メルケル級のひとも好きだが）

イギリスのサフラジェットたちは婦人参政権を要求して、首相官邸の鉄柵に体を縛りつけたり、爆弾を仕掛けたり、ダービーのレースの際国王ジョージ5世の持ち馬に身を投げて自殺するという、激しい戦術をとったりしてやっと婦人参政権の必要性を訴えていた。

私は『未来を花束にして』というタイトルでは想像もつかない映画を見て激しい運動をしていたサフラジェットを初めて知ったのだけど、そうでもしなくては、男性には気づいてもらえなかったのだ。

反逆や抵抗や闘いは運動の時にやるものだ。政治は違う。政治とは、自分の正義を声高に主張することではなく、説得することであり、論敵を負かすことではなく、人々の違う意見や利害を調整することである。と著者ははじめに述べている。現在の日本の女性の置かれている状況はまだ運動レベルではないかと思ったりするが、彼女の『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』に描かれている「エンパシー」こそが政治家の重要な素質なのだ。

2020年1月1日の時点で、選挙で選ばれた国家元首152人のうち女性はたった10人。なのにコロナ禍で成功したのは女性政治家ばかりという印象。しかし、それは彼女たちが政治という男性優位の社会でずば抜けた手腕と能力を持った優秀な政治家だからというのが本書の結論。

そして女性の政界進出を阻む「サイバー暴行」の章は、理解してもらえなくても男性に理解してもらえないといけない章だと思った。恐怖だけでなくおぞましさがつきまとう理由。



ニューヨーク大学の社会学の教授によれば「比較的、政府への支持と信頼があり、女性と男性の硬直した区別をしない政治文化」を持つ国が女性指導者を選ぶ。

とも書かれているが、日本はどうでしょう？